

プレイリーダーのいる子どもの遊び場に関する研究（第3報） －児童館（神戸市）における調査事例－

○梶木 典子* 瀬渡 章子** 田中智子** 堺 真弓*³

（*奈良女大・院， **奈良女大， *³(株)エムケーシー・スタット）

【目的】子どもの遊びを見守る指導員（プレイリーダー）が常駐し、地域の子どもの遊び拠点という位置付けの児童館を研究対象とし、大人が関わる遊び環境の今後のあり方について検討するとともに、地域社会における子どもの遊び環境の整備要件を明らかにする。

【方法】神戸市の既成市街地を調査対象地（中央区、灘区、東灘区）とし、①児童館の現況調査（児童館数、規模、活動状況等）、②児童館職員へのインタビュー調査、③児童館利用小学生対象の利用実態、日常遊びに関する質問紙およびインタビュー調査を行った。

③の利用実態調査は1998年11月に3児童館で実施、回答者数は173人であった。

【結果】立地、地域、建築空間、運営等の違いにより各児童館の特徴がみられた。一般来館児童と学童保育在籍児童では屋外遊び場に対する要望等いくつかの回答に差異がみられた。いずれの児童館でも低学年児童の利用が多く、来館理由は友達と遊ぶこと・雨の日でも遊べること・行事参加が多かった。また、閉館時間が早いことに対する不満が最も多かった。児童館は子どもの遊びのきっかけをつくり、遊びを発展させる場所としての役割を担っていることが明らかになり、今後、高学年・中高生の利用を促進し、地域の子どもの遊び拠点として認知されるためには、ソフト・ハードの両面での整備が課題である。